百万

次第

竹馬にいざや法乃道くさ乃
友を尋ん

ワキ詞

是ハ和州三吉野の
者にて候是に渡里候おさなき
人ハ南都西大寺のあたりにて
ひろひ申て候又此比ハ嵯峨の
大念仏にて候程に此おさなき
人をつれ申念佛に参らばやと

あらありがたや念仏乃拍子
やはげにな世と拂とわれは庵
南無阿弥陀佛　南無阿弥陀佛
南無阿弥陀仏　南無阿弥陀佛
ここ通む人無たのまよ念仏よ
なま通やぜりまきとも西へ趣く
阿弥陀佛通ふすした光　旅ぬ

通きの道旅りも落中のさゝ原へさき
見うや生死魁狂　こゝと穢心り
遊離乃あはしゝ車にあゝ車
煩悩とも涙如　水もなとも
ひとやえいさゝえ何をしゆ
一とまた乃世弥陀乃力彩めや
たのめ南無阿弥陀佛　きなりや

世にもと浪を庵にのつゆもり
まどりるまぐなをを此閣を曉
やらぬ朧月の薄墨に鐘は
ほめぐよりに猶三更比くひのき
うやむ浅く成万にとちらいふ
い浅く成さくーてひのる音
ゑいさらえいをひんやく

此まもちの人あわく小ゝお
南方の姿ハ本よりわなの黒
髪を剃髪乃ゝしく乳ーて
かわらぬあわーひきの深く
又に眉の墨おぬ乱墨うきー心の
おしき鳥安のゝ袖光人いうひも
きそ思もぬ人を大底ぬまさな

親子のちきりわあさき夜のこさ哉
其色見てひろうにまよひ　ひうを
むすひて肩に掛　むしろ袂
ひりこもなき乱心なりし南無
称名弥陀仏と信心をいひしも
我子にありむなあわ　南無や
大慈悲出来ずの子ふありしと

狂氣なをもはゝしめ数經ま申を
物ひらん　いまの中へ我事なら
何るまくるう　是阿鬼狂を
継くのみ人人在故人のはゝかく
清八ゑおかう那のう饒所乃
換まてらとふ所里らん　是ハ
思ひもよらぬ事を達はものか

ぞやらんと申て下りくれきうにけり
申てハいかさま先成狂女なれども
国里ハいづくの者ぞ（シテ詞）これハ
奈良の都百万と申ものにて候
（ワキ）扨何故狂人とはなりて候ぞ
（シテ）妻に死してはおくれたゞ独忘形見
乃緑子にさへ離れて候へは

思ひの乱れて候（ワキ詞）扨もさこそ
いふもおろかや思ふ様に狂ひ候
べきぞ（シテ詞）何ともかうも狂ふ故に
あらみゝ黒髪乃なき地こそ人に
面をさらすも若もやわが子
廻り逢やあふと思ふ小乃里濃者
立てござ仏中男なれども我子よ

あはせといの風なるを誰より
ひとはしきける加那陀信心
まれたく勝く色がかと雅集子
尾中小なとのは四里也さらん
うれしき人の言楽りなぐ声小
付てもありてさ浅法楽子蘇を
まふつ浅なわけやしらんや

人もよぶきさしきなくも此法
佛も羅睺為長子と悦ぶハ
我子にありふ世乃袖なれや歌子
あふ世子袖なれや百万り蘇を
つんるもとのへも尾萬乃蘇の袖
かりこ此りゑいの風なわ
実やおもむ見まハばなりとても

ひとめ守宿ひまぬ時ふしぎ心も
明し此世をも何を頼まんや
生等流転りの色重が香盛枝乃
ぬれ衣に何とまほき世中を
あさ浪のよるべん無く雲水の
が落果りの風の葉の木末乃
露のみさとはうらむる月哉

嬉しにさしも二世と契りし
なり浪からまわり乃末葉の流る
ざ能ひもとめぬあさき露なのきさ
まつ秋色なる果て法月の花
しきたへの蔓りの風さへ繁るの風
風そての露このまりしは哀
二おもて兎も角も憐人乃

赤栴檀の宮殿のにし神女哉
現して天竺震旦我朝三国よ
渡まゝおはし数くも少なし
あまきの人皇　安居乃内清と申も
ば母摩耶夫人の孝養報恩ゝある
なましまし佛も悲母を此たまのふ
みちびきしばりもや人間乃为

としてなりゆかの悲母を此ますめにこ
ず子を恨こ为をかこちが世こたせま
しく悲術やりつ親子あふする㐂
袖なきや百万の藤哉見仏く
おりつ我子恋しや見かとも多きさに
人乃中になるとやかりこのなかな
やさしおい我子恋しやかりのこ

ば法本當ハもとよるとも前生濃
うみ乃保なま道母も諸ともに
廻可之何しみ法乃功可あるこそさき
飲ひもみ人法乃宗旨を熱ま悩み
嬉しきさよく